

中国建国 70 周年軍事パレード (パレード大好き習近平の切り札は人民解放軍)

元東部方面総監 渡部悦和

2019/10/02

中国は 10 月 1 日に建国 70 周年を迎え、北京の天安門広場で軍事パレードが行われた。兵員約 15000 人、戦車等の車両約 580 台、航空機約 160 機が参加し、最大規模のパレードであった。

米国との貿易摩擦や香港問題など国内外で難しい問題を抱えるなか、一連の行事を盛大に行う目的は国内的には国威発揚だが、国外的には米国をはじめとする諸国に、習主席が指導してきた人民解放軍改革の成果特に核戦力の 3 本柱 (ICBM、潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM)、核搭載戦略爆撃機) の威力を知らしめることだ。

この種のパレードで肝に銘じたいことは「木を見て森を見ない状況に陥らない」ということだ。個々の兵器を詳細に分析することが「木を見ること」であり、そのこと自体は重要なことだ。しかし、もっと重要なことは「森を見ること」で、「パレード全体が意味することは何か」を考えることだと思う。本稿においては、この点に気を付けて軍事パレードを分析していきたい。なお、写真のほとんどは中国 CCTV の中継放送から入手した。

習近平主席の野望実現の切り札は人民解放軍

習近平主席の野望は、「中華民族の偉大なる復興」であり、2049 年までに「社会主義現代化国家」を樹立し、「世界一流の軍隊」を建設することである。つまり、米国に追いつき追い越し、世界一の覇権国になることだ。

習近平主席は、無類の軍事パレード好きで、この 6 年間で 3 回目の大規模な軍事パレードを今回実施したことになる。前任の主席である江沢民や胡錦濤がそれぞれ 10 年間で 1 回しか軍事パレードを実施していないのとは対照的だ。

そして、今回の軍事パレードでも明らかになったことは、習氏の野望を実現する切り札が人民解放軍であるという事実だ。習氏がパレードでの訓示で、「中国は世界の東方にそびえ立ち、いかなる勢力も我々の偉大な祖国の地位を揺るがすことはできず、いかなる勢力も中華民族の前進を阻むことはできない」と主張した時に、その最終的な根拠が軍事力であることは明白だ。

パレードの冒頭で国旗よりも先に共産党旗が登場したことが如実に示すように、国家よりも共産党が優先される中国において、共産党一党独裁が続く限り、共産党の軍隊である人民解放軍の増強が進むことを我々は覚悟すべきだ。

中国は多種多様なミサイルを保有する世界一のミサイル大国

中国の戦力の中核は多種多様なミサイル戦力である。中国は過去数十年間、核及び通

常抑止力を強化するために軍事科学技術の窃取や開発に多くの資源を投入してきた。米国に対抗するためだ。中国は、米国が核戦略見直しによって「戦術核兵器使用の敷居を下げた」と認識し、「将来の戦闘で核兵器を使用する可能性さえある」と警戒している。

今回のパレードは、中国の核及び通常抑止力を米国などの諸国に誇示する良い機会であった。今回登場したミサイルは、DF-41、DF-17、DF-100、DF-5B、DF-31AG、DF-26、HQ-6A、HQ-9B、HQ-12A、HQ-16、HQ-22、YJ-12B、YJ-18などだ。

●米国の INF（中距離核戦力全廃）条約の破棄には合理性がある¹

米国は、INF 条約を破棄したが、その決定は妥当である。何故ならば、米国とロシアが、INF 条約の規定により地上発射の 500 km から 5500 km までの核弾頭及び通常弾頭を搭載したミサイルの破棄を求められている間に、INF 条約の当事者ではない中国は INF 条約に抵触する多種多様なミサイルを開発し装備化してきたからだ。その結果、インド太平洋地域において、中国が中距離核戦力において圧倒的な優位に立っている、また、中距離のミサイルを中核とした中国の接近阻止/領域拒否（A2/AD）戦略が非常に有効に機能し、米国の戦力特に海軍艦艇の西太平洋地域への接近を阻止している。

米国が INF 条約で禁止されてきたミサイルを開発・取得する可能性は高い。我が国は今後、米国の中距離ミサイルの配備候補地となることが容易に想像されるなど、今回の軍事パレードが日本に与える影響は大きいのだ。

●大陸間弾道ミサイル「東風 4 1（DF-41）」

新型の ICBM 東風 4 1 は、固体燃料で道路を機動可能であり、サイロから発射される固定的な ICBM に比較して秘匿性と残存性に優れる。最大射距離は 15000 km で、最大 10 発の核弾頭を搭載でき、中国本土から全米を射程に収めることができる。中国の対米核抑止力を大きく高める兵器である。

東風 4 1（DF-41）



●極超音速弾道ミサイル「東風 1 7（DF-17）」

今回登場した新兵器の中でも特に技術的に注目されたのがこの東風 1 7 だ。マッハ 5

¹ Andrew S. Ericson, “Military Parade Shows Beijing is a Missile Superpower”, The National Interest

以上で飛翔し、途中で軌道を不規則に変えることができる極超音速滑空兵器であり、日米の既存のミサイル防衛網では対処がむづかしいと言われている。

この技術を確保する為に米国、中国、ロシアがしのぎを削っているが、正式に実戦配備した国はなかった。もしも中国が東風17を実戦で利用できる兵器として完成していれば世界初の快挙となるが、実態はどうであろうか。

東風17は、2列島線に到達する射程（推定射距離1000km～2000km）を有するという説もあり、これが事実とすればグアムの米軍基地のみならず、日本の全体がその射程内に入る可能性がある。これへの対抗を真剣に考えるべきだ。

東風17 (DF-17)



●長距離巡航ミサイル「長剣100 (CJ-100)」

長剣100は、長剣10 (CJ-10)（主として地対地巡航ミサイル、射程1500～2000km）の改良版で、射程2000km～3000kmであり、第2列島線に到達する。長剣10に比較して精度と飛翔速度も向上し、これに対処することは難しくなっている。ターゲットは米国の空母機動打撃群特に空母などの大型艦艇である。

長剣100 (CJ-100)



●潜水艦発射弾道ミサイル「巨浪-2」

「巨浪-2」は、相手からの第1撃から生き残り、第2撃能力を有する貴重な核戦力である。戦略ミサイル原潜から発射され、航続距離が7,000kmと短いJL-2は、中国近海からだと米本土に届かない。米本土に近づいて射撃して初めて米本土に到達できる。

無人機

無人機の重要性については、米軍がイラクやアフガニスタンにおける対テロ戦争にお

いて多用して得られた多大の成果を見ても明らかだ。最近では、サウジアラビアの石油精製施設が巡航ミサイルと無人機により破壊されて、世界中に大きな衝撃を与えた。

中国は、米国に次ぐ世界第2位の無人機大国であり、人民解放軍が多様な無人機を導入するのみならず、中東などにも輸出している。攻撃型の無人機分野では米国を抜き世界一の輸出国になっている。

今回の軍事パレードにおいても多様な無人機が登場したが、特に脚光を浴びたのは攻撃型の無人機の利剣（CJ-11、英語では Sharp Sword と呼ばれている）と無人偵察機 DR-8（WZ-8）だ。

これらの無人機と我が国は対峙しなければいけないが、現状では対処能力は限定されている。中国製無人機への対処は喫緊の課題であり、レーザー兵器、高出力マイクロ波兵器などの開発が急がれる。

●ステルス無人攻撃機「利剣（GJ-11）」

利剣は、米国の X-47B、英国の「タラニス」、フランスの「ニューロン」などに似ているが、これらから技術を盗用した可能性がある。ちなみに、米国の X-47B（ペガサス）は、空母離発着のステルスの無人戦闘攻撃機（UCAV）として開発され、レーザーと高出力マイクロ波で敵のミサイルや通信施設を破壊できる。米海軍は、X-47B の開発計画を中止し、現在は無人偵察機である MQ-25 と空中給油機である RAQ-25 の開発が計画されている。

利剣は、中国初の国産空母「001A型」に無人偵察機として搭載されるという。空母などの大型艦艇に無人機を搭載することは世界中でトレンドになっていて、中国も例外ではない。

一方で、利剣は、飛行中に他と航空機に燃料補給が可能な無人偵察機「MQ-25」ほど多用途ではなく、その主要任務は 300 キロから 400 キロ離れた目標にミサイルを正確に命中させることを補助するために、艦艇搭載ミサイルシステムの情報を収集することだという。また、敵の防空網が密集している地域の偵察や、外国の艦艇の追跡に利用できるという。

X-47B



利剣（GJ-11）



●無人偵察機「DR-8（WZ-8）」

超音速偵察機 DR-8 は、米軍の高高度無人偵察機 D-21 に似ている。D-21 は、偵察用

の無人機として 1962 年に開発が開始された。

DR-8



南シナ海や西太平洋で米空母打撃群と遭遇した場合、DR-8 が重要な役割を果たすことが期待されている。

DR-8 は、40 年以上前に引退した米国の超音速 UAV 「D-21」 に似ている。米国はこの無人機を中国でのスパイ活動に使用し、活動中に多数の無人機が墜落し、その残骸は中国各地に散らばったままになっている。墜落した D-21 の一つは、数年前に北京の軍事博物館で展示された。

DR-8 無人偵察機は、中国の「航空母艦キラー」である DF-21D 対艦弾道ミサイル、DF-26 弾道ミサイルの射撃を評価する任務も果たすことになる。DR-8 は最大マッハ 3.3 の D-21 よりも速く移動し、敵の防空網を突破し、情報を持って無事に戻ってくることができるという。

航空機

今回登場した航空機は、Y-20、KJ-2000、J-20、J-15、J-16、J-10B、H-6N、H-6U などで、この分野でも多様さと質の向上が見られる。

● 「H-6N」と「H-6U」

戦略爆撃機 「H-6N」と「H-6U」が登場したが、「H-6U」は爆撃機 H-6 の空中給油型であり、パレードでは戦闘機に空中給油する姿勢で飛行していた。

H-6U



「H-6N」は、飛行中の燃料補給を行うことにより航続距離が 10000 km へと大幅に向上したと報道されている。

●第5世代ステルス戦闘機と自称する「J-20」

J-20 は、今回のパレードでも注目を浴びた。J-20 は 2017 年に空軍部隊に配置になり、ステルス戦闘機の量産は昨年末から始まったと報道されている。私はこの報道を信用していない。J-20 が本当に量産体制に入るか否かは、今後人民解放軍が 100 機以上取得するか否かを見極めたい。

J-20 に関する最近の話題は、J-20 が中国の次世代空母に対応するように改造され空母艦載機になるという。人民解放軍の最高意思決定機関である中央軍事委員会は現在、J-20 を新しい空母に採用することを支持しているという。この根本原因は、現在の空母艦載機である J-15 が欠陥機であるからだ。

一方、J-20 の最大の問題は重量ではなく長さであり、艦載機を目指すならもっと短くする必要がある。その為、技術者たちが新しい発射システム（電磁式カタパルト）に対応する J-20 の短縮バージョンの開発に取り組んでいるらしい。

J-20 のもう一つの問題は、エンジンであり、J-20 専用に設計された WS-15 エンジンは数百時間のテストを経ているが、信頼性の目標をクリアしていない。そのため、中国製の WS-10 とロシア製のエンジンを仮のエンジンとして搭載しているという。

中国海軍は 2030 年までに少なくとも 4 個の空母戦闘群を編成する計画だ。中国が次世代の艦載戦闘機を開発するには少なくとも 10 年はかかるとみられ、欠陥機の J-15 を使い続けなければいけない運命にあるのが中国の空母だ。

情報戦関係装備・部隊

人民解放軍は「情報戦環境下における局地戦に勝利する」を合言葉に訓練していて、情報戦を非常に重視している。普通の人には注目されないが、情報戦、サイバー戦、電子戦、宇宙戦を担当する戦略支援部隊の指揮下部隊もパレードに参加していた。戦略支援部隊は、習主席の人民解放軍改革の目玉であり、この点は注目されるべきだと思う。

最後に

●中国の宣伝戦に惑わされてはいけない

中国の三戦は有名だが、軍事パレードにおいては宣伝戦に注意しなければならない。本当に DF-17 の滑空弾の能力や DF-26 の対艦弾道ミサイルとしての能力が、実戦で本当に使用し得るレベルに達しているか否かは今後とも検証していかなければいけない。過度にこれらの兵器を恐れてしまう愚は避けなければいけない。

●軍事パレードは壮大な無駄使い

結論的に言えば、中国の軍事パレードは壮大な無駄使いだ。軍事パレードが壮大であればあるほど、私はうれしくなる。なぜなら、軍事パレードをいくら見栄え良く整然と実施したとしても、それはあくまでもパレードであり、実戦的訓練とは程遠いからだ。このパレードのために長い者で数年前から、短い者でも半年以上前からただパレードの

ために時間を費やしているはずだ。その間、実戦的訓練を行っていない。

軍事パレードを頻繁に行う軍隊は精強ではない。実戦的訓練を重視する米軍が大規模な軍事パレードを実施しない理由がここにある。

●言行不一致の中国に適切に対処せよ

習主席は、「我々は平和発展の道を堅持し、ウィン・ウインの開放戦略を実施する。引き続き、世界各国の人民と共に人類運命共同体を打ち建てることを推進していく」「世界の平和を断固として守らなければならない」と演説したが、中国の非常にアグレッシブな姿勢とこの演説の中身との乖離は余りにも大きい。習近平体制化の中国の「言っていることと、やっていることの乖離」と軍事力の増強は今後とも変わりそうもない。

我が国は、中国の軍事力の脅威に真剣に備え対処しなければいけない。